

トップすることもありません。どうにか不十分ながら  
工事は終わり、今までの十枚以上の田が一枚になり、  
稲もまずまずのできて、やれやれでした。

まだまだ負け続けているのが山です。戦時中は鉄と  
戦い、戦後は木でした。燃料が無いので山から木を切  
り出して薪を焚いていました。今の子供たちに見せて  
やりたいものです。空襲でたくさんの家を焼かれ、ま  
た長い間の戦争で家までは手が回らない状況でした。

こうして戦中は鉄が重要でしたが戦後は木が建築材  
の主体となり、山から木の切り出しは大変な重労働で  
した。今はそのおかげで脚痛が残りこれとの戦いで  
す。この木材も外材の安いのがたくさん輸入されてい  
ます。また山では松食い虫の総攻撃です。松山は少な  
くなり、そのせいかマツタケは高値です。山は水を蓄  
え空気を浄化してくれますので大事にしたいもので  
す。何分今のところ採算が取れないので山仕事は大変  
です。

負けた話ばかり申しましたが、世界一番がありません。  
それは長寿です。二十代で多くの戦友を亡くしま

したが、我々は戦友の分も長生きをして、少しでもお  
国のために最後のご奉公ができれば幸いです。

昨年妻を亡くし役場勤めの三男と同居しておりま  
す。長男は二十五歳で病死、次男は明石で会社勤め、  
娘三人は嫁いで、私は孫と嫁の四人暮らしです。嫁は  
幼稚園勤務です。

私は現在恩欠連の和田山支部の副支部長を支部発足  
以来勤め、及ばずながら頑張っております。

## ドンゴロスの兵隊（一）

岡山県 田上 建

昭和十九（一九四四）年八月二十六日十二時過ぎ、  
私の乗った所有船「多力丸」が日生の港へ帰って来  
た。隣組十一軒のうち五軒の門に当時応召兵士の家の  
風景である二本の日の丸が、交差してはためいてい  
た。それを見た私は、にぎやかに友達と一緒に入営で  
きると心強く思った。

昭和十九年の徴兵検査は、戦争も拡大し兵員不足のためか徴兵年齢が引き下げられて、一歳下の人と共に検査を受け、私は甲種合格となった。またそのうえ、昭和十九年からは第二乙種の人まで現役兵として徴集されることになっていた。

「九月一日、現役入隊」の電報を八月二十五日に大阪府堺港で受け取った。日生から堺の日本耐火煉瓦株式会社への原料を積んで、前日の二十四日に入港し、二十五日は朝から五十五トンの積荷を揚げていた。その日の揚げ荷は仲仕の人々の厚意によって残業の末、揚げ切ることができた。そしてその夜の遅い夕食は工場長宅で姉妹の心尽くしをご馳走になった。

その夜半、堺港を出航した所有船「多力丸」は、六甲山から吹き下ろす強い風を受け、「多力丸」は八馬力のエンジンをフル回転し続け、二十六日正午帰港し、我が家の日の丸を見たのである。

入隊前は何かと忙しく、毎日が慌ただしく過ぎた。特に以前から進んでいた婚約の話を確認するために着初めをすると言うことで、叔父さんとの間に話は進

み、結婚式になってしまった。生死のわからぬ戦地に向かうことであり反対をしていた私であったが、「着初め」などの意味がわからずに準備は進んでしまい、祖父や父に謀られたと今でも思っている。

入隊前日の八月三十一日は、朝から親戚の人達が我家へ集まり、また見送ってくれる人たちも来てくださったが、前夜の鯨飲の影響で頭が上がらない。父が用意してくれたせっかくの料理も口に入らず、大きな皿に乗せた魚の身を少しと、ようかんを一本食べて家を出た。鹿島八幡宮にて見送りを受けた後、日生町の式場である現在の町立病院のある場所へ急いだ。その途中、祖父は近くにある岸本家の井戸のところ、  
「ここで別れるから」と言ってお出て行く私を見送ってくれた。いつになく多勢の入営者と共に、当日は召集を受けた人達も一緒になったので、にぎやかな出征風景となった。その時、山本唯雄軍曹が代表で挨拶をされたのではないかと思う。

一夜過ぎて練兵場に集合する。練兵場は入隊者と、各中隊から受け取るためにきていた将校、下士官、そ

して見送る人達でござつた返していた。友達と別れ、呼ばれるまま私は一団の中へ入つて行つた。そこは、中部第四十八部隊第一大隊二中隊へ入る一団であつた。

下士官に連れられて兵舎に向かう時、小学校時代から聞いていた軍隊生活や、報道されていた戦争の模様などが頭に浮かび、また今日までの苦しい仕事や空腹に耐えて来たことを思い出しながら、緊張していた。

歩哨の立つ營門を入ると、營庭の向こうには同じ姿の兵舎が並んでいた。第二中隊に着くと一班の舎後が自分の席と決まっていた。班内は薄暗く、これからの生活がここで始まるのかと思うと急に淋しくなつてきた。多分、刑務所もこんな所ではないかと連想もした。

早速、班長や班付き兵長から色々注意や心得について説明があつた。中隊長は宇野中尉であり、一班の班長は内田軍曹であつた。班は真ん中の廊下を境として舎前と舎後に分かれ、廊下の銃架には歩兵の一番大切な小銃がずらりと並んでいた。寝台は二段になつており、藁布団の足元には棚があつた。その棚の上には

私物を入れる手箱があり、その横には整頓が悪いと言つては木銃で崩された衣類が四角に積み重ねてあつた。棚の下には、帯剣や銃の手入れをする道具を入れた袋が下がっていた。

その日のうちに着ていた私物は全部脱ぎ、支給品と着替えて兵隊らしくなつた。しかし、支給された軍服はよくもこれまで耐えられたと思われる明治時代の製品であつた。この詰襟の服は毎日の演習による破れがひどく、夜になると針と糸を出しては慣れぬ手つきで繕わなくてはならなかつた。そのうえ驚いたのは、初年兵には營内靴がなく、便所に行くのも裸足であつた。便所から戻ると入口の水を入れた箱の中で足を洗い、横にある筵ひらで足を拭くとそのまま毛布の中に入つて寝ていた。

このようにして、私の軍隊生活は始まつたのである。最初は赤飯で祝つてくれたが、日が経つに従つて状況は段々と厳しくなつてきた。我々は現役兵で若かつたが、一カ月早く入隊した年上の補充兵は、我々

と比較され苦勞していた。陰では日本最後の補充兵だと馬鹿にすると共に、我々は負けてたまるかと皆頑張ったが、「小銃を持つての教育は、皆それぞれ入隊までに習ったものとする」と教官に言われた。

そのため早速、戦車肉迫攻撃から訓練が始まった。支給された明治時代製作された服は、匍匐前進や模型戦車肉迫攻撃する棒地雷や背負って戦車の下に飛び込む破甲爆雷攻撃などの訓練によって破れ、そのうえ生傷の絶えぬ毎日であった。

私は、班長と同郷だということで二班に編入替えさせられ擲弾射手を命ぜられた。擲弾筒で思い出すのは部品のリング（転輪）を落して、夕暮まで全員で捜すことを命ぜられたことであった。広い練兵場の中で、夕暮まで捜したが見付けることはできなかった。私はこれに懲りて面会にまた父に頼んでリングを作ってもらい、それからは常に予備を持つとともに、リングを二つずつ全部の擲弾筒についたことを思い出す。

その後、命令で毒ガス教育を受けたり、夜間演習したり、秋期演習があったりした。昭和十九年の十一月

に入って少しすると、我々もいよいよ原隊から出て行くらしいという噂が出た。いよいよ戦場かと、緊張の日を過ごしたが、一向、被服の交換もない。一月の半ば、地震が起きたりして驚いたり、そのうち空襲も込んだんと激しくなった。そのうち、憲兵隊に入ることになり、私の人生は大きな変化が出て来たのである。

憲兵教育では「正しいと信じることは、上官であろうとはつきり言え」と教えられた。私は正直に毎晩書く反省録に、正しいと思ったことを書いて提出したら「区隊長悪かった。謝る」と三回赤字で反省録に書かれていた。それは市中で行う演習で、市民感情の差が区隊長と私との間にあり、意見発表を区隊長に押えられた悔しさを、その都度反省録に書いたためでした。

いよいよ六月三十日の卒業の日が近付いた頃、区隊長より「戦争の悪化により全員朝鮮全土に配置することになった」と発表された。我々は皆、それぞれ原隊に帰ることを楽しみにしていただけにがっかりした。

憲兵隊は情報が集まる所かと思っていたが、私達には戦争の状況がよくわからなかった。内地の空襲、沖縄の激戦、岡山の原隊で聞いた硫黄島の玉砕等を心配していた。そのうえに、広島に新型爆弾が落とされ、続いて長崎へも落ちたと聞くと、いよいよ決戦のときが近いと想像してお互いに張り切っていた。

ソ連軍が着々と兵力を増強し、狙撃五十個師団、十五機甲師団、戦車四千両、飛行機五千五百機、総兵力百五十万人が続々と国境へ集結していたことも知らず、我々は毎日を過ごしていたのである。それに対して迎え撃つ日本軍は二十個師団であると言われていたが、実際の戦力は九個師団しか無かったという。

昭和二十年八月十日か、十一日であったろう、北青駅で取り締りをしていた泊兵長より、駅は避難列車で大混乱になったと連絡が入る。ソ連の参戦は一切知らなかっただけに驚きと共に身の引き締まる思いで緊張していた。翌日新北青駅に行くと、興奮した大勢の人々で混乱し、口々にソ連軍の優勢と日本軍に協力している中学生と女学生の働きぶりを話していた。次々

に入ってくる列車は屋根の上や連結器の上まで人が乗っており、煤煙で真っ黒い顔をしてしがみついていた。それらの人々は長く食事をしていないと聞き、早速兵站より食料をもらって炊き出しをした。列車の中で弁当を配っていると、邦人の護送だという軍人が多く南下していた。

平穏な北青の町にも戦争の緊張感が湧き上がり、艦砲射撃の音が夜の静けさを破ったが、すぐ近くの戦場では中学生や女学生を巻き込んで戦っているとは思えなかった。八月十二日、清津港がソ連艦艇から砲撃されたそうでその音が夜になると聞こえていたのだと思う。そんな夕方、警察から緊急電話があり、ソ連の上陸用舟艇が接近していると言う。非常呼集で集まった隊員に状況を説明しながら、梨本准尉は城戸軍曹を連れて偵察に行く準備を急いでいた。実弾携行するため弾薬箱を出してきたが鍵がない、保管している土肥兵長の姿も見えない。急いで捜す一方で泊兵長が鍵を壊して実弾を取り出し、いざ出発とトラックに乗ったところで誤報の知らせが届いた。

## 終 戦

昭和二十年八月二十五日、混乱の続く新北青駅から、朝の交代時間を延ばして支線に乗り北青駅に帰って来ると、駅は大勢の人で溢れていた。客車の窓からは現地召集になった人たちが顔を出し、大勢の見送る人々と別れの言葉を交わしていた。すぐ北では戦っているというのに丸腰の姿だったので、聞くと現地で補充するということであった。その見送りの中に梨本准尉を発見し、新北青駅の混乱状況を報告したいと近寄ると、「急いで分隊に帰り、十二時からの玉音放送を聞け」との指示を受けた。時計を見ると時間が無く、真夏の日差しの中を必死に走りやつと間に合った。居合わす全員が一生懸命に聞いたものの、雑音が多くてはつきりとは分からぬままに終わってしまった。しかし断片的に「耐え難きを耐え」「忍び難きを忍び」「以て万世の為に」等と聞いた言葉を皆で合わせると戦争は終わったらしいと想像できた。戦争が終われば、一気にソ連軍が迫って来るであろう。我々はどうしたらよいか。在留邦人はどうするのか。考えても

いなかった課題に遭遇して、皆の心は揺れ、口々に不安を募らせていた。大通りへ出ると、いつもと違い人影がなく、息を潜めたように静かで異様な雰囲気であった。その道を進んでいると一軒の民家の入口に、木の香も新しい大きな看板があり、それには「朝鮮解放独立委員会北青支部」と書かれていた。多分、終戦の情報を地下組織から得て事前に用意されていたものであろう。

早速、咸興の地区隊本部へ看板について問い合わせたが、「そのまましておくように」との生返事であった。しばらくして咸興刑務所が解放されると連絡があり、直ちに留置人を解放すると共に、急いで重要書類と私物を焼却するように命ぜられた。留置人は四、五人いたと思うが、衣類など与えて釈放すると喜んで帰っていった。

書類や私物は学校の運動場にあった壕の中で火をつけた。軍隊手帳、写真、思い出の品等、過去を消すことにためらいながら燃え続けるその火を見守っていた。

長かった八月十五日の夜が更けても誰一人寝る者はなく、今後について話は続いた。若い我々としてはソ連軍の捕虜にはなりたくない。しかし、そうなる和我々は生きて日本へは帰れないだろうから、武器弾薬を持って山へ入り、最後まで戦おうと意気込む、だが補助憲兵の人達は家族の事を心配するのであるう、そんなことはやめて欲しいと話していた。

我々がこんな話をしてしている間に、若い朝鮮の憲兵補二人が姿を消した。この二人は憲兵を援助するための教育を受けて数日前に配属されたばかりだったが、日本が敗れたことによって、憲兵協力者として今後苦労するのではないかとかわいそうに思えた。

## 混 乱

翌八月十六日の夜になって、心配していた邦人に對する嫌がらせが始まった。夜になると邦人の家の戸を叩く、石を投げ込む、そんな家から次々と電話が入って来た。

早速、その夜から二人一組になって徹夜の邦人擁護

の巡察が始まり、それは武装解除まで続けられた。邦人の家を訪ねて回る街角には、凶器やこん棒を持った若者が各所に五十人から百人近く集まって騒いでいた。私達は日本刀を腰に差し、実弾を込めた拳銃をポケットの中で握りしめて歩くという緊張した毎晩であった。

終戦になって間もなく、マッカーサーの命により、中国、満州、朝鮮の引き揚げが終わるまでは、憲兵警察官による治安業務を行う。そのため帰国は三年後になるであろうと、地区隊本部からの通達があった。その通達により皆息を吹き返したように元気になった。取締りの強化も考えていたが、ソ連軍が進出してくるに連れて通達は次第に影が薄くなり、いつ結成されたのか、北朝の保安隊は目を追って力を増していた。

不安の増す中、南下して地区隊本部と合流してはどうか、また本部からも引き揚げの話があったが、梨本准尉は「在留邦人を捨てて引き揚げることはできぬ」と言って頑張っていた。しかし不穩な情報に流れる北青の町で、我々十数人の憲兵隊員で邦人が守れるのか

どうか不安もあった。

ある日、飛行機の警備兵が、ガソリンを探しに来たが補給することができず、自動車置いて帰っていった。その後、このトラックの活躍により、兵站から食料の確保などができた。ソ連軍の進出を目前に、一日と少なくなる自由の中で、電話も朝鮮語でなければ通じなくなった。地区隊本部との連絡も交換嬢の中に一人いた日本娘に助けられたが、電話器を握る度に不安であった。

#### 北鮮老人の言葉集

ソ連軍が来たとの誤報が飛び交っていた頃、我々の一人歩きは不安であった。補助憲兵の人達も毎日の買出しには、私が在留邦人から預かっていた核の仕込み杖を護身用として持って出掛けた。

ある日、駅の方角から地鳴りのような歓声が聞こえてくる。不思議に思い、木陰で休んでいる老人に尋ねてみた。するとその老人は、ソ連軍が来たと言う情報が入るとその老人は、ソ連軍が来たと言っている情報が飛ぶ度に若者達は彼らを迎えるため、駅に集まって

騒いでいるのだと教えてくれた。そしてまた老人は私を慰めるように静かな口調で、「日露戦争当時、進出して来たソ連兵によってこの北青の町は略奪強姦で大きな被害を受けた。今度もソ連軍が入って来たらどうなるのかと心配している。その事を知らない若い者達がああして騒ぎまわって、困ったものだ。日本の統制時代が一番平和でよかった」と話してくれた。不穏な白眼視の中でこのような考えを持っている人もおられることを知り、嬉しくまた心強く感じ、今も忘れられない。

#### 武装解除

今日は歓声が聞こえず静かだと思っていたのに、警察からソ連軍が入って来たとの連絡があり、梨本准尉は迎えるため警察行き。我々はいよいよ武装解除かと落ち着かない。午後四時を過ぎた頃、梨本准尉がソ連軍将校を連れて帰って来た。それを小中曹長の指揮で整列して迎え、ソ連軍将校は答礼をするとすぐに通訳を連れて、分隊長室へ入っていった。眼鏡をかけた長い



小銃を持った兵隊が入口に、そしてもう一人は分隊長室の入口に立つ。立哨したソ連兵の軍服は脂と垢で黒く汚れていた。後で聞いたところによると、レニングラードの戦闘を終えてから来たことが分かった。そして頭が全員丸坊主であったことから四人の一線部隊であったのだろう。

初めのうちは立っていた兵隊は間もなく壁にもたれて口笛を吹き始めた。続いて歌を歌ってなかなか賑やかである。厳しい憲兵隊の日常からは、およそ考えられぬ事であった。こんな兵隊達にどうして負けたのだろうと口々に小声で囁き残念がった。

武装解除後、在留邦人の安全を心配しながら過ごしていた。その頃「憲兵隊には野菜を売らぬ」という嫌がらせが始まった。町の各家には日の丸を改造した朝鮮の旗を掲げていたが、町外れの一軒の家に青天白日旗を掲げた中国人の一家が居た。四十才代の二人の男と朝鮮人の妻、そして大変かわいらしい十二才程の娘と十才程の男の子が住んでいた。その家へお願いに行ったらところ気持ちよく野菜をもらえる事になった。

そこで食用油のドラム缶一缶をお礼として持って行く事にした。翌日から、私達が留置場へ入るまでの間、二人の子供達が毎日、白眼視の中を運んでくれたのだった。

戦後、中国で助けられた話を聞く度に、朝暗いうちから畑で働く二人の男、家を守る妻がどかっと座っていた座板の下にあった粟の山、明るい元氣な姉弟が野菜を積んだ大八車を引いていた姿、北の町外れの一軒の中国人一家を、いつも感謝の気持ちと共に思い出す。

#### 保安隊

治安維持は憲兵と警察官で行うと言っていたマッカーサーの命令もいつの間にか消えて、北鮮では保安隊が結成され力を増していた。金隊長は、憲兵隊の動きを知るために常に接近していたのだろう、佐藤、城戸軍曹達とは以前から交際があったようである。十五日の玉音放送直後の独立解放委員会の看板にしても、この人達が地下組織を持ち、互いに連絡を保っていた

ものであろう。

保安隊の門には銃を持った歩哨が立ち、警備は厳しかった。私達が警察の武徳殿で生活するようになるのを待っていたように、保安隊の動きが大きく感じられた。早朝、塀の向こうを朝鮮語で日本の軍歌を歌いながら、連日行進が始まった。日本の軍歌ではないかと保安隊員に聞くと、「日本が朝鮮の歌を真似ていたのだ」と平然としていた。私達の移転後、留置場から武器弾薬を出して、若者を集め軍事訓練をしている姿が想像できた。

それと前後して、日本人全員を二時間以内に小学校に集め、保安隊が包囲してしまった。我々を監視下に置き、計画的に行ったのであろう。そしてソ連兵が北青へ入る度に、日本婦人を接待に出すよう強要するようになった。また憲兵隊では炊事や世話をしてくれていた朝鮮の婦人一家が、迫害に遭っているとの噂を聞いたのもこの当時であった。

丸腰の私達であってもまだ頼れると思うのか、いろいろな人が尋ねて来た。ある日、端川の邑長さんが、

奥さんと娘二人を連れて暑い中を歩いて来たが、その顔は汗にまみれ黒い斑となっていた。早速顔を洗うように勧めたが、洗おうとしない。後で分かったことが、戦地の女達と同様に日本の女性も顔に墨を塗って歩いていると知った。女性達は結婚前の長女の着物を何枚も何枚も重ねて着ていた。その格好で暑い中をよく歩いたものだ、女の我慢強さに驚いた。

サーカスの団長は、ソ連兵に女性団員を全部連れ去られたと涙ながら話すのを、血が騒ぐ思いで聞いた。それらの人達も、各二、三日一緒に暮らして後、小学校へ行った。その小学校と隔離されている我々には邦人の苦しみは断片的しか分からない。入ってくる情報は悲しい話ばかりでその都度、悔しい思いに激昂する毎日であった。

九月中旬になり、少しでも南下したいと邦人の出発が始まった。私達も最後の引揚げと共に咸興に下がることに梨本准尉も同意した。第一回、第二回と出発し、病人や妊婦を残した最後の人達と共に北青を離れ

ることになった。出発するにはいろいろと制約があり、金は三百円以上持ち出し禁止であったので余分の金を隠して持つて行くのに苦勞していた。また、三八度線を突破しようと付近の地図、方向を知るための夜光羅針盤を取り寄せるようにし、拳銃と仕込杖は縁の下に埋めた。

そんな準備をしていた時、保安隊から梨本准尉と小中曹長に呼び出しがあった。それは出発予定三日前のことであつたが、最後の引揚げが迫つても二人は戻つて来ない。保安隊に聞いても分からず、帰るまで待つかどうするかと思案したが、相談の上、次第に不安が増してくる北青の町から離れることに決めた。

いよいよ明日は出発だという日、保安隊員から隊長が呼んでいると呼びに来た。ズボンをはいていると保安隊員は「そのまま結構です」とズボンを脱がしてしまつた。全員が庭に整列すると、金隊長が出て来て「簡単な工事をします」と言う。今更何をさせるのかと思ひながら保安隊員について行くと、薄暗い所に案内された。そこは留置場だと気付き、その時初めて金

隊長の Kouji というのは工事ではなく「拘置」であつたのだ。

振り返つたら、前も後ろも小銃の銃口が我々に向けられていた。小さな留置場の入口から全員が押し込められたが、大変狭く、魚市場のトロボ箱に入った魚のように、頭と足を交互にしてやっと横になれる程度である。もちろん、便所の上にも寝なければならぬ。

一人が便所へ行けば全員が起きなければならず、そのうえ、長い間臭気に悩まされた。一日も早く北青を離れたいと考へていたのに、とうとうこんな事になつてしまつたと思うと、その夜の粗末で少ない夕食は喉も通らず夜が明けてしまつた。

一夜明け、邦人は無事出発できるだろうか、早く帰れると予想していた考への甘さを思い知つた。また、これからどうなるのかと不安に思つていた頃、私達が留置場に入った直後から、我々の方をじろじろ眺めながら前の通路を次々と若者が歩いては、一夜明けた朝からは憲兵隊員が次々と呼び出されて行つた。

私は北青に来て日も浅いから関係ないものと思つて

いたが、通路を歩く若者と目が合った途端、「貴様出て来い」と呼び出された所は、元警察の取調べ室であつた。中に二人いて、その中の一人が「貴様に拳銃で二度驚かされた」と言う。そして机の上に出された指を、竹の根の筈むちで、背中の方は太い角材で殴られた。私が二度拳銃を出したのは、警察の武器弾薬の略奪事件と、銀行の現金輸送の時以外には無かつたので、その時居合わせた者が憲兵を叩くことによる優越感を求めたためであつたらう。

その日、一日中、次々と呼び出されて全員が筈と角棒の洗礼を受けた。中でも佐藤軍曹が一番激しかったようで、歩くこともできず、小さな入口から蹴り込まれて帰つて来た。頭から流れる血を拭き寝かせたものの、その後三日ほど食事をとることもできず、ただ唸り続けていた。私も体と腫れた指が痛み、箸が握れず食事には苦勞した。その後も身動きのできぬ狭い留置場で監視の目を警戒しながらの日が続いた。梨本准尉達はどうしたらう。邦人は暴行を受けているのではと、どんどん暗い、悪い方向に向かつて噂をし合っ

た。

その翌日から、ソ連軍の取調べが始まつた。数人目に、ソ連将校が「タガミタケーシー」と呼びに来た。取り調べ室へ入ると、中には朝鮮人の通訳が座つていた。ソ連軍将校の詰襟の縁とズボンの縫い目には小豆色の細い線が入っていた。日本でも兵科が変われば色が變つていたので、ソ連では何科の将校なのだろうかと思つた。その将校がテーブルの奥へ、そして右側に通訳が座る。やにわにソ連将校が私に向かつて何か言つたと思つと、腰に下げていた菱形の短刀をテーブルの真ん中に突き立てた。何事かと通訳の顔を見ると、通訳は、「正直に答えなければこの短刀でお前を刺す」と言つていると言う。了解すると、次に本籍、住所、氏名と聞いてくる。

名前を戸籍の通りに「たうえたつる」と答えると、急に将校の白い顔が真っ赤に染まり腰の拳銃を抜いたと思うとピタリと私に向けられた。それと前後して隣の部屋からは、拳銃の音と共に大声を上げながら机や椅子を倒して逃げ回る音が聞こえて来る。これは多分

警察官が撃たれて逃げているのだろうと思うと、自分の置かれてる現状から自分の人生もこれまでかと観念した。観念してしまふと心が落ち着き、日本の字には読み替えがあるということソ連兵に説明してくれるよう頼むことができた。

ソ連兵はなかなか理解できず、通訳は長い間、説明に苦勞していた。しばらくしてやっとテーブルの上に拳銃が置かれ、次の質問に移ったものの、半信半疑の様子で、銃口は私の方に向かって白く光っていた。それからの訊問らしかったのは、最後に聞かれた憲兵隊の命令系統だけであった。ソ連軍の侵入してからの略奪、強姦から考えると、当然私達も同じだろうと思っていたのであろう。終わりにソ連将校から「お前は誰に調べられたと思うか」と尋ねられた。私は「ソ連のゲーペーウー」だと答えると、ニコリして「陸軍の士官である」と教えてくれた。

留置されて一週間目の九月二十日、全員外へ出された。太陽の光が眩しく目が明けられない。わずか一週間でこんなにもなるものかと驚いた。狭く困っていた

留置場であったが半数にもなると、寂しさを感じた。出ていったのが良いのか、残された私達の方が良いのかと、それぞれ考え込んで言葉少なになっていた。

翌日になると警察官や北青郡の郡守さん、元憲兵だったりんご園の主人が入ってきた。郡守さんは小学校に集まった日本人の責任者として、保安隊とソ連軍を相手に悪戦苦闘された人だけに、死ぬより辛かったと涙を流しておられた。りんご園の主人は頭に血が固まり目は赤く顔は腫れ上がった姿で入って来て、りんご園の無くなるのは仕方がないが、せめてこれだけはと水筒の中に紙幣を押し込んだがそれも無くなってしまったと笑っていた。一言も弱音を吐かず毅然として座っている姿に、さすが明治生まれの先輩だと感心したものである。

我々の、死ぬより辛い苦勞は、刑務所へ入ってからますます続いて、捕虜収容所、ソ連、八路軍、人民裁判などを体験しながら、「ドンゴロス（麻袋）」を着て平壤病院に入院し、「ドンゴロスの兵隊」と言われた体験談を次にしたいと思う。